

シュムペーター『經濟分析の歴史』1954年

東 畑 精 一

1 は し が き

シュムペーターは1950年1月8日の早曉に急死したが、その死に至るまでの6、7年間を經濟學史の著述に没頭していた。この遺稿となったものはそれ以來シュムペーター夫人の獻身的な努力によって、整理編纂されていた。恐らく1950年中には出版されることと豫定されていたが、中々進まず、漸くこの春になって世に送りだされることとなった。本文だけで1184頁、それに編纂者たる夫人の序文、編纂の上での附録・索引などが附された堂々たる大冊である。原名をあげると、*History of Economic Analysis*, by Joseph A. Schumpeter. Edited from manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, New York, Oxford University Press, 1954. pp. xxv + 1260 である。私は幸にして少し以前に本書のゲラ刷を送ってもらっていたので、兎に角この書を忽卒の間にはあるが、一讀することができた。この初夏に新刊を手にして以來、また、あちらこちらと本書を繙いている。

本書のなかに現れてくる人物だけでも、プラトーン、アリストテレス以前のギリシヤの學者から、極く最近の學術雜誌に見られる經濟學者に至るまで、およそ1200名を数えうるであろう(索引による)。また純粹な經濟學的思惟それ自體、ならびにその構成に關聯する背景と地盤との思想の悉くが見事に取扱れてあるので、たとえ經濟分析を中心とはしているものの、その中核を繞ってぐっと引きしめられた1つの壯大な普遍的社會科學史となっている。ここには世界のあらゆる國語を以て著わされた價值ある著書が登場してくる。こんな次第で之を著わすために必要とされた著者のエネルギーと學識と熱情とには脱帽しないわけにはゆかないものがある。讀者のもつ斯ういった印象は、シュムペーターの著書を読む場合にはいつも感ずるところであるが、この最後の著作に至っては一層つよく現われて、本書が全く尋常のものでない範疇の書に屬しているのを恐らく何びとにも納得せしめるであろう。

この廣汎さと深さとに接して私は到底この書をここに純然たる學問文の形で「紹介」し、そのなかに現われている見解に對して批判を加える任に堪えうるものでない

ものを十分に自覺している。そこでただ本書のいわば外面的輪廓とも呼びうるものを簡単に紹介し、通讀の間に湧きいでた感想とでもなされうるものの若干を率直に記述して、責をふさぎたいと思う。これは本書を既に讀んだのではなくて未讀の人に對する文字通りの紹介たることを意味する。ただ豫め記したい點が1つある。以前にシュムペーターの『經濟學史』を中山伊知郎氏と共同して翻譯した際に、この書は、經濟學史という一個の獨自の對象と方法とを具えている獨立科學を樹てたものだ、との印象をもったが、こんどの新しい學說史『經濟分析の歴史』においては、それが一層つよく私に迫ってくるものがあるという點である。

2 本書の構成

まず本書の構成である。(本誌の昭和25年第1卷3號に都留重人氏が其の詳しい章別目次を載せている。)5つの編からなっている。第1編、緒論(範圍と方法)およそ50頁、經濟學史とは何であるかの序論である。最後の第5編、結論(現代における經濟學の發展)およそ45頁、筆をケーンズ批判とマクロ經濟學に終えている。斯くて分量から言っても大半は他の3つの編に費されている。すなわち第2編はおよそ350頁、ギリシヤの始めから1790年頃までを論ずる。この間にスコラ哲學と自然法哲學、通例マーカンティリズムと云われるもの(但し、シュムペーターは1つの思想體系として斯かるものを斷然否認している)、フィジョクラット、アダム・スミスの『國富論』公刊後のおよそ20年の間のことが、時代的にも體系的にも問題的にも立派に整理せられている。シュムペーターは本書のなかで、「思想の連續性」と云う點を強調し、思想の系譜を求めること(Filiation of Economic Ideas)の記述に重點を置いているが、この第2編はいわゆる古代中世を論じたものであって、そこにはおよそ近代的なるものの萌芽がいたるところに存在しているのが窺われる。また殊に中世を取扱っているところから、イタリアやスペインの比重が大いに増してきている。私にとっては素よりのことであるが、多くの人にとっても恐らく、此の編は通例の經濟學史が極めて簡単に取扱っているに過ぎない部分であるので、新しき問題は

素より新しき著者や新しき著書が（殊に例えは経済学者としてのチェザレ・ベッカリアの如し）續々と登場してきている。どうもシュムペーターにとっては、アダム・スミスは近世の始祖というよりは寧ろ中世の送葬者であった——そこにスミスが既存の思想を體系化して後に残した意味の大きな功績がある——ものの如くに感ぜられてならない。

第3編、1790年より1870年、スミスを承けた後の、経済学のいわば百花繚亂の世紀である。イギリスの世紀であり、また経済学の一世紀である。370頁、いわゆる「古典学派」の時代である。私の印象からいうと此の編の敘述が最も自由闊達、最も流暢華麗であると思う。大道を悠々と歩むと云う感じが強いが、これは素より此の間の経済学が——或いは経済学者が——およそ大綱大道を踏みはずさないで専門的技術的なるものの部分知識の位置を自ら知っていたからにもよるが、また同時に之れを取扱っているシュムペーター自身においても、最も熟し最も親しかったものであったからにも由来すると思う。最後に第4編、1870年以後、第一次大戦までである。これは表題とは異って問題によっては1949年、著者の逝去の直前に至るまでの種々の見解を取扱っていて第5編との連結をはかっている。およそ400頁に近く、歴史学派を取扱った後に、純粹経済学的分析の諸内容を互細くまなく論述する。

3 前著『経済学史』との關聯

此の構成を見て、また本書を讀んで感ずる2點をあげたい。1つは本書が著者の青年時代の著『経済学史』（原名は『経済学説及び方法の諸段階』）との間にもつ關係である。シュムペーターは若い頃から屢々傳記学者オストワルドの言葉を傳えたことがある。それは、およそ大きな思想體系は學者が30歳までに完成するものであるとの趣旨のものであった。これを傳えたシュムペーター自身がまた宛かも其の甚だ良い例證となると思われる。彼が少壯時に既に大著を世に送り、新たな経済分析の方式を他に傳えたが、それは経済学においては30歳にならないで著した前掲の『経済学史』を含む3部作においてであった——その社會学においては如何であったかは、いささか疑問であるが、しかしここでもややそれに近いものがあるであろう。さて此の萌芽たる『経済学史』が擴大生産せられたのが、この『経済分析の歴史』であった。シュムペーター夫人は其の編輯者序文のなかで此の點を指摘している。原著者の最初から期していたのは此の若い頃の書を「修正し、アップ・ツー・デートのものたらしめる」ことにあった。それは兩書の編別を見ても

窺われるところであって、第1著書の第1、第2章をひくくめたのが第2著書の第2編であり、他の第3章、第4章は全く第3編、第4編と吻合しているのである。これは宛かもシュムペーターの少壯時の景氣變動に關する論文や『経済発展の理論』（1912）のなかの思考方式が成長して、後日における龍大な『景氣變動論』2卷（1939年）に擴大されたのと類している。貫徹している論理の大本においては正に同一なのである。

しかし此度、増訂せられた主要な部分はもちろん甚だ數多い。中世思想の部分、殊にスコラ哲學者や自然法哲學者たちの舊い見解でおよそ経済学的分析を形成するに與つたもの、地盤となったものは、實に克明に掘りだされる。つまり経済分析の思考を、その原材料たるべき廣汎な普遍的思想のなかから、分析蒸溜してくるのに懸命の努力がなされた。これは今度新しく加えられた部分で、夫人の記するところに依ると、或る時期に一兩年に互つてシュムペーターは自然法思想の攻究に殆んど夢中であつたということである。ハーバード大學のなかにクレス文庫というのがある。これは経済学の稀觀書、珍籍の一大蒐集——夫人の言葉で云えば「経済学者のパラダイス」——であるが、この文庫が全くよく利用せられたであろう。シュムペーターは1933年渡米してから、アメリカのルーズヴェルト政策始め一般の世間の霧圍氣には必ずしも親しめず、時には不快なりとしていたようであり、殊に歐洲文明の破壊と彼れに感ぜられる第二次大戦の時期を甚だ憂鬱に送つたようであつたが、其の自らの慰めを此の文庫での讀書や此の書の著作に求めていたのではないかと思う。

何れにしても斯くて舊著の増訂は著者自らが豫定せる分量を越えて自然と龍大なものとなつてしまつたのである。第3編も然りであるが殊に第4編に至つては然りである。第1著が現れてから正に35年、この間における純粹経済学的思惟の發展はおどろくように大きく且つ廣く、経済学の面目を一變せしめるような感がある。その詳細が此の第4編に記されてあるのであつて、茲では第一著作の該當の諸章が成長したと云うよりも、寧ろ新たな諸章がぞくぞくと附加されたと云うのが適當である。正統学派経済学の崩壊こそ経済学史に關する關心の勃興の機縁となつたとすれば、正に今日は新たな學問史のための機縁とならざるを得ないであろう。更に、特に第3編においてであるが、ここで注目されるのはマルクスの學説が、至るところで論議の對象となつている點であろう。およそ其の純經濟學説と目せらるべきものの悉くが、それぞれの場所に登場してくる。これはマルクスの如くあらゆる問題に觸れて自己の學説を體系的にたて得

た人に對するものとして當然であろう。いわゆる非マルクス學者の著述のなかで、斯くもマルクスが度々その姿を現わしてくるのは稀れであろう。マルクスは本書のなかで最も屢々遭遇する名前の1つである。エンゲルスは一點を除いては附録の如き名前であり、經濟學者としてのレーニンは最も屢々でなくお目にかかる著者の1人である。僕は率直にいつて此の書を読んでから、今まで殆んど全く顧みなかったマルクスの經濟學說に對する關心を大いに喚起せられた。一度びは之れを讀了したいとの念にかられる。

4 本書が遺稿であること

第1に述べなければならぬのは、本書がシュムペーターの遺稿であるという點である。この遺稿はばらばらとなつてあちらこちらに散在していたもので、その全貌が必ずしも明白でなかつたこと等から、夫人が編輯者として如何に苦心苦勞を重ねたかに就いては、夫人の序文や編輯者としての附録に詳しく述べられてある。此の點は讀者の一讀することを乞う以外にない。ただ全體としての印象から云えば、本書の大半、9割までは兎も角も既に執筆され、その大部分のタイプ刷が一度びは原著者の目に觸れていたと思われる。——何びとも知るように、夫々の書物の成立の心理的順序とその書の中に描かれている學說の論理的順序とは異なるものである。また此の論理的順序と現實に著者がなした執筆の順序とも異なるものである。こう考えると本書の第1編諸論と第5編諸論とが恐らく著者の頭のなかでは最もおそい心理的順序を辿るものであり、また最もおそい執筆の順序にあつたものであろう。實際においても全體のなかの最終章である第5編第5章「ケーンズと現代のマクロ經濟學」はその死の直前に原稿をタイプストに渡したままのものである。

かくて本書の遺稿である性質が、第1、第5の兩編に最もよく現われている。原稿がところどころで、途中で切れている。例えばケーンズの場合でも、その原稿ではケーンズのモデルの「動態化」を論じ、その終りに一部分は速記の文字で 'Other points to be added…… Macroeconomics will need a new conceptual apparatus…… new general objects…… multiplier…… accelerator……' と記されてある。しかし此の遺稿的性格は第1編においても、あるいはもっとその程度が強いのではないかと思う。例えば其の第4章「經濟學の社會學」、すなわち知識社會學的な經濟學の考察、社會的生産物としての經濟學の考察も然りである。この章の第1節「經濟學の歴史は果してイデオロギーの歴史であるか」という甚だ興味深い節自體がすでにトルソーに終っている

が、執筆目次にある他のこれまた甚だ魅力のある2節(1つは、科學的努力の原動力と科學的發展のメカニズムを、他は、一般並びに經濟學における科學に従うもの Personnel of Science を論ずるようになっている)が、全部缺けているが如くである。彼れはイデオロギー的見解が如何に經濟學において強い力をもつか、を明かにしながら、然も斯かることから如何に脱却して、もっと客觀的なものたり得る經濟學があり得るか、を論じた當りは最も苦勞した點であるかと思う。

5 經濟學史の性格

思うに經濟學史には——ある觀點からすれば——二大範疇があるであろう。それは今日に至るまで多種多様の學派があり、それぞれの學派は自己のいわば絶對性を主張する——尤も個々の學者の個々の勞作や年齢の段階を考えると、その絶對性の主張の内容自體において變化があるのは當然であろう。歴史學派の鬪將シュモラーの如き其の壯年期と晩年におけるとでは、理論に對する考え方が全く逆になっていると思われる節が多い。——ところが、斯かる諸學派・諸學說・諸經濟學の存在を、その儘に認めて經濟學史を描くならば、それも1つの「經濟學史」とはなるであろう。舊いものの博物館的ないし新しいものの博覽會的な性質が其の場合、そこには消え難いであろう。そこでもう1つの範疇の經濟學史があり得る。それは斯かる個々の學說をその主張者の云うようにそれぞれ絶對的な個物的なものとは看なさないで、それらをば悉く部分的眞理の主張となして其の各々に其の適切な歴史上の場所を與え、従つて博物館的な列擧羅列並列から脱して、立體的、構成的なものとなすのである。斯くて過去の學說をば悉く自己の一元的體系のなかに包括するが、自己はそれらの個別的なものの上に1歩を超えんと志すものである。これを構成的學說史と呼びたい。およそ學說に發展があり、これを發展せるものとして把えんとする主體的努力があるならば、その把えること自體がまた1個の發展でなくてはならない、というのが恐らく斯かる立場からの主張であろう。

嘗てメンガーが『社會科學の方法論』を著わしたときに、シュモラーが之れを批判し、いわゆる「方法論争」が展開されることとなつた。この批判文のなかでシュモラーがメンガーの方法を批評して「演繹的」(deduktiv)たる語を使ったとき、メンガーはそれを讀んで自分の持っているコピーの中で、鉛筆で其の語に「構成的」(composit) という語を ? を附して書きつけている、ということ、近頃ある書物で讀んだことを記憶しているが、經濟學的基礎概念が正しく本來は「構成的」なものでな

くてはならぬが、夫れと共に、尙お一層その程度を強めて經濟學史が諸學説を *composit* に包攝していなければならぬのではないかと思うものである。——斯かる大ざっぱな分類は或いはシュムペーター自身からの怒りを買うことになりはしないかと恐れるものではあるが、しかも私は此の『經濟分析の歴史』こそ斯かる第2の範疇の書物たることが極度に努力せられたものであると、これを通讀しつつ感ぜざるをえないものであった。

比較的完成度の高いのは第2、第3、第4の諸篇である。しかし夫れでも所々に原稿が中絶していたり、また約束されながら論述が缺けているのがある。アダム・スミスの資本蓄積論の取扱いが缺けていたり、アメリカの制度學派殊にヴェブレン批判が約束されながら無かったりするが如くである。農業經濟學の項目があるだけで内容がないのも(第4編第6章第5節(d)項)一寸私の専門からは淋しいようにも感ずる。恐らく1、2頁の記述ではあろうが、1870年以後この項目に登って論議される農業經濟學者がだれであったであろうかと想像するだけでも、却って未完成の偉大な書を読むものの感興をそそのかすものがある。

6 經濟分析の歴史

これは經濟分析の歴史であって、經濟思想や政治經濟學の體系の歴史ではない。經濟思想が世間一般或いは經濟學者たちの心の中に浮んできている・一定時代の經濟的問題に対する意見や希望というようなものの全體から成立しているのに反して、經濟分析は斯かる場面と異って、科學的な即ち道具化された分析武器(*tooled knowledge*)の使用によって經濟的問題の分析を企てるものである。この兩者の相違を強調することは、シュムペーターにおいては本書執筆のために2000年の間に世に表われた諸著者の思想を検討してゆく間に、1歩1歩と明確になり最後に確然となったような感を與えるし、また此の點は特に強調せられて本書の中に恐らく最も見事に浮彫せられてくる。

こういう意味合で經濟分析は一種の専門技術的な知識である。ジョン・ロビンソン夫人の云ったような意味で、それは道具であると爲さねばならないであろう。其の限りで人は此の『經濟分析の歴史』が道具箱の歴史のようなものであって、まさに經濟専門學者中の専門家の讀むべき書物となすであろう。まさに其の通りである。しかし本書を讀むものは、通例の専門家用の専門書が一般に讀者に與える印象や感覺とは異なるものが、其の中に横溢しているのを感じるのである。純粹經濟學や計量經濟學の書物の中には、如何にも専門書であるとの感覺を

與えるが、それと同時に、夫れは「技術」書であり、「職人的」必携書であるとの色彩が覆いぬぬものがある。なんとなくそこにはエスプリが缺け氣魄に乏しいものがある。蒸溜水とかメタボリンとかの如き印象を與えることが多い。ところが此の書は斯かる専門技術的な分析の武器を満載しながら、しかも斯かる武器が再び前に述べたような「構成的」見地から統一され、活力と清鮮さを注ぎこまれている。それは何故であるか。およそシュムペーターにとっては科學的知識、道具化された用具というものが其のもの自體として構成せられているのではない。それらは何等かのヴィジョンの存在によって其の誕生の胚種が培われているのである。ヴィジョンが蒸溜され結晶せられることとなるのである。斯くてシュムペーターにおいては經濟分析の歴史を追うことは、この分析用具のそもそもの成立から始められねばならない。「經濟學の歴史がイデオロギーの歴史であるか」を問わざるを得ないのである。こんな次第で彼れの廣汎な知識、廣大な讀書力、強烈な記憶力、頑丈な分析力を四方、八方に驅使して、經濟分析の用具と其の原材料ともいべきものが探究せられる。經濟思想であれ政治經濟學の思潮であれ、歴史學であれ、論理學であれ、統計學であれ、社會學であれ、心理學であれ、悉くが其の時代時代に應じて、經濟分析の用具の1つ1つの成立との關聯において、また其の限りにおいて、緻密に検討探索せられるのである。讀者は此の蒸溜の過程に接し得られるから、精製せられたものの精新さを感じるのである。社會科學に影響し、經濟分析の種を宿している哲學の如きも、斯かる立場より俎上にのぼらざるを得ない。萬學の胚芽を藏しているスコラ哲學や自然法、つづいてイギリス功利主義哲學を論ずる當りは、まさに本書において壓倒的な興味をひきおこす所以である。如何にここで廢棄物が多いかを知らねば、製品のもつ意味を把握することができない。斯くてこれらの哲學は哲學史上の哲學ではなくて、經濟學史上の哲學として取扱われる。——これが此の『經濟分析の歴史』をして極めて壯大ないわゆる専門技術書たらしめるのみならず、更に1歩を超えて、この書に「精神」を吹きこむ所以であろう。私が始めに本書を1つの雄大な社會科學の歴史であると爲したのは、斯かる點をも顧慮したからであった。

斯くて各編の構造が規定せられる。3つに分たれた時代において(殊に最後の2つの時代において)、其の記述はまず「道具化された經濟分析の用具」の周邊から始まる。この云わば原材料とも爲さるべき時代の舞臺、經濟狀態から始めて、隣接諸科學の發展狀態の如き云わば純粹經濟學的概念にとっては知識の與件とも爲さるべきも

のが、最初に取扱われる。つづいて各時代の代表的なる人物と其の學說とが論評される。そして各編の終りの2ないし3章こそ、經濟分析の精髓たるもの、髓の髓まで經濟的範疇たるべき専門技術的知識が、問題ごとに展開せられているのである。それも最初には基本觀念、つづいて個別諸學說に及ぶが、その整理の原理は實物的分析と貨幣的分析との兩分である。貨幣論は斯くして何時でも各論の最終章となっているのである。

7 本書を初學者にすすめる2つの理由

此の書の所論の1つ1つの内容、殊に他種の經濟學史との相違、本書のなかにおける新しい洞察、見解などを記述し論評することは私の爲し得るところではない。それは私の爲した今までの努力の数十倍のものを前提とするであろう。それで最初にも記したように、通讀の際に得た色々の感想を以下に記したい。

私は次の2つの理由で此の書を經濟學を研究せんとする初學者にも勧めたいと思う。1つは恚ういう點からである。經濟學の教授すべき知識が近頃大いに増加して、ややもすると古典の知識、古典による訓練が——かつてあったのにと較べて——相對的に大いに減じていると思われる。古典は既に古典であり、その精粹は既に現代最新のものに悉く吸収しつくされていること自然諸科學の如くであるとされて、古道具屋の納屋にしまい込まれたものの如く取扱われている弊がないとは云い得ない。自然諸科學にあっては最新のもの過去の精華の上に立つという眞理は、餘ほど正しい認識であろう——然しそこでも一世を動かすようなものは必ずしもそうではなくて、過去の學說のなかで全く過去の老廢物として捨てられていたものの中から、裝を新にして生れてくるの例がなくはない。そう云う意味で新説は過去のものとは斷續して現われるような外觀を呈するが、實は忘却せられた過去のものの中に胚種として存し、従ってその新説の系譜化・系統化が連続的に行われうるのである。——ところが社會科學にあっては、例えば藝術の場合と甚だ類して、過去のものでただ夫れだけの理由で老廢物となるものではない、そしてまた最新のものも悉く過去の精粹を吸収しているということは——今までのあらゆる學者の、先きに述べた「構成的」な努力にも拘らず——あり得なかつた。斯くて古典は生きていてギリシャ・ローマの藝術品が現代に生きていてと同様であり、また現代批判のためにも生かされ得るのである。學說史研究の深い興味がそこに存する次第であるが、それと同時に古典の學說を知ること自體が、現代の教授法に伴う缺陷を大いに補うことになるであろう。そう云う意味では本書は大い

に有益なものとなるであろう。古典の精髓というものを纏めたものが甚だ少ないからである。

第2に近代經濟學が日々に供給している分析のパターンは激増しつつある。そして吾々はややもすると分析技術的に甚だ分化しているものに當面している。殊に初學者にとっては此の分化したものの叢林のなかに入って、その全貌・大觀を見喪う危険がつよい。大綱を見ないで個別的技術に最初から没頭することは、ややもすると經濟學の精神を没却する危険がつよい。本書の第4編第7章「均衡分析」の1章は本書のなかでの歴巻とも爲し得るもので、そのほぼ120頁にまたがる敘述は、およそ近代經濟學の大觀と個々の問題の理論上の地位とを傳えるのに遺憾はない。その大山脈のあらゆる山容、尾根、澤、溪谷の悉くが畫かれている。ワルラスが中心であるのは云うまでもないが、敘述は1949年のあらゆる注目すべき雑誌論文にまで至っている。尤大なエネルギーが注がれているように思う章である。少くとも私自身にとっては甚だ有益な問題の大觀を與えられた近代經濟學の高度な入門書であった。二大問題、「生産函數」(1027—1053頁)「效用理論」(1053—1093頁)は、最も嚴密なる分析の20世紀50年間の史的發展を總攬的につたえたものとして最も熟讀せらるべき概論であった。これらを読んだ後では此の頃の經濟學雑誌に接して親密感が加わったと思うものである。

聞くところによると(夫人の序文)、シュムペーターは、嘗て靜態的分析に對するワルラスの『純粹經濟學要論』、ケージアソン・エコノミックスに對するケーンズの『一般理論』と同じような地位にある・動態的分析に對する自分の主著を著作せんとする熱望をもち、そのために尤大な資料やノートをつくっていたということである。不幸にしてそれは著者の死によって永遠に不可能になったが、そのあるものの片鱗は上にあげた章に主として見られるのではないかと感ずる。現代の經濟學の最も大きな此の課題への入口が茲に用意せられている意味で、これは單純な學說史のみであると爲すわけには行かない。compositな學說史は前途への大きな展望を準備していなくてはならないのである。近頃中山伊知郎氏が私に云ったことがある。この『經濟分析の歴史』といった大著には恐らく幾つかの讀み方がある。その1つとしては個別問題の歴史的發展を専らその發端から現代に至るまで個別的に端的に辿ることであって、それによって此の視角から大きな經濟學の姿と、その個別問題の新しい突破口が用意せられる、というような趣旨のものであった、そして其の1つの場合として「資本概念」を挙げたが、これは初學者たるものが恐らくこの書のもつ構成的な特質

を最も良く生かす1つの途かも知れない。

8 本書のうるおい

本書は當然に問題に就いての強靱な思索の歴史であり従って厳格な構えをもって終始している。その意味で例えばワグネルの音楽にこもっているような執拗さが満ち満ちている。しかし1個の読みものとしての本書は、この厳格さと執拗さとのみで満ちているばかりではなくて、その間に、少しのイキを抜き讀者を飽くまでひっぱってゆく、1つの必要なアクセサリーとでも云いたいものを點在せしめている。それは大小幾多の經濟學者たちの人物評論であろう。時に長文のものがあつて、時に寸鐵のものがあつて、これはただ夫れだけとしても中々魅力的である。シュムペーターは早熟であつたせい、およそ半世紀に亙る經濟學者としての活動があり、また實に國際的に廣く動いた人であつて交遊の範圍も廣かつた。そのうへ好んで人の傳記、しかも大冊の傳記を讀んだ。レクリエーションに傳記を讀んだということである。最後に他人の學說に對して飽くまでも寛容であつた。斯かるタイプの頭腦は學說史を書くものの1つの有力な條件であるとも考えられるが、それだけに彼はまた Menschenkenner であつたし Menschentum に通じていた。彼自ら親しく接した講義ぶりが記されてある場合すらがある。「1843年に彼は永久にロンドンに落つた、そして彼のような貪欲な讀者にとっては、これは永久に大英博物館に落つたと云うのと殆んど同じである」(マルクス)。「ダーウィンの論文以前に、下級(簡單)な有機體から高級(複雑)な有機體が進化してくるといふブエフォンの考え方を再発見した人は深遠であると呼ぶのが正しいであろう。そして(機關車の)速度計……を發明した人は「賢明」という句が傳えるもののすべてを具えている。しかし自由放任の自由主義を極端にまで擡げて、遂には衛生規則、公營教育、公營郵便制度等をも否認することによって、自分の理想を滑稽なものとなし、自分の擁護していた政策に諷刺としては充分に役だち得たものを著述していたのを洞見し得なかつた人には、「馬鹿」という語ぐらい良く適するものはない」(スペンサー)。「何故に此の偉大な人物が、マーシャルによって全く覆われていたのであるか。その答え——これは科學の社會學の立場から、殊に何が人氣を博するか又その理由と遣り方如何の見地から、興味深い——は次のように思える。彼は強い印象を興える教科書を生み・弟子たちを集める力に缺けていた、彼は愛嬌があり寛大であつて自分自らの如何なる要求をも主張したことが無かつた、彼は一方では餘りに敏感、他方に餘りに謙遜に過ぎた。彼は全く

その背後にあることに満足してマーシャルをアキレスであると稱揚した。會話では躊躇し、病的というほど放心的であり、考え得べき最悪の話し手であり講師であつた」。そしてこの「寛大」に附註して云う「彼の寛大さは特殊な種類のものであつた。それはマーシャル及びリカルド・ミルの遺産の線に全く沿う寛大さであつた。人間性は悲しきものだ!。彼はオーストリア學派、ワルラス、ヴィクステード、並びに其の理由を私は理解し得ないがムーアに對しては、明確に寛大ではなかつた」(エッチワース)等々といった類である。これらは單純なる人物紹介でもない、もとより經濟學者逸話の類ではない。全卷數百人にわたる此の種の——こまかい活字で印刷されてある——文は、恐らく何びとも經濟學史の研究を深めるに役だつ興味と關心とをそそるであろう。

9 むすび——構成史的學說史

經濟學史は問題の歴史であつて、素より人物のそれではない。しかし如何してもその問題の人物が浮んでこなければならぬ。シュムペーターの場合においては、事柄と問題とに關する限りは、彼れ自身の名前は此の1200頁の書物に——いつもの如く——一度も現れてきていない(但し夫人の手によって若干附記せられてある)。これは彼が私の假りに名づけて「構成的」と呼ぶ其の學說史を著わす立場からは當然とも云わべきものであろう。大きな氣魄で過去2000年に亙る洋々たる知的潮流の精華を自分のなかに攝取し盡くすといふからには、それは容易に想像し得られるところの處置であらう。攝取するものは攝取されるものの如くに其の名があげられる對象とはならないからである。しかしながら——恐らく私の單なる、且つは多少ともひがんだ印象であるかも知れないが、然も抑ええないものである——此の間に、この巨匠の腕ともいふべきシュムペーターの能力と才幹とを以てしても、2人の人物だけは、其の悉くが必ずしも其の攝取包含の體系のなかに好都合に吸収しつくされているとは思えない。此の『經濟分析の歴史』のなかで、マルクスは實に度々と現われてくるけれども、しかし其の位置は度々本流から外れてくるのを見過すわけにはゆかない。ケーンズ論評に至ると——この書はシュムペーターの今までの著述や論文と異つて、表現が端的であり流暢さを加え、「思わせぶり」な筆致を大いに減じている——、條件文が急に増してきたり、複雑な構成の文章が現われたりしてくる。恐らく何びともシュムペーターの懸命の努力を疑うものはあるまいし、また既存の學說の1本化への努力こそ構成的な學說史の使命であるので、この努力は感銘を興えるのであるが、しかし依然として私の此

の印象はつよく残るものがある。少くともリカルド—學說の發展やワルラスを繞る敘述の自由奔放、天空を駆けめぐる筆致とは餘程の趣を異にしている。——だれか私のこの如き印象を1つも残さないような1人の學說史家はいないであろうか。云い換えたならば、此の『經濟分析の歴史』の人名索引のなかで、單に頁數だけしかあげられていない多數の者と異って、其の各々の個別學說についての頁數までが挙げられている 27 人の學者——トーマス・アキナス、アリストテレス、ベッカリア、ボーム・バヴェルク、カンチョン、ペーツ・クラーク、クルノー、エヂワース、フィッシャー、ジェボンズ、ケーンズ、マルサス、マーシャル、マルクス、メンガー、スチュアート・ミル、パレート、ペッティー、ケネー、リカルド—、セー、シーニョア、スミス、チューネン、チュルゴー、ワルラス、ヴィクゼル——に對して1大學說史上の夫々の個別的な地位を賦與しうる總括的な構成史的な學說史を描きうる學說史家はいないであろうか。シュムペーターの此の遺著には其のための大きな用意が、恐らく經濟學史界において始めて、ととのえられてあると思う。

餘事ながら1つ記したい點がある。此の書に 1200 名餘の人名が現われてくることは既に述べた。日本の經濟學者は果して、2000 年に互る經濟分析の歴史に對して、何のあづかるところも無かったのであるか。シュムペーターには日本の學界に對する關心が相當にあったことを示す記述がある (1153 頁註)。それにも拘らず——發表文の語學の關係だけを理由として挙げるのは弱い——た

だ1名の日本人が登場してくるだけである (但し索引には出ていない)。都留重人氏のケネーの再生産表式論 (スウィーージー『資本主義發展の理論』附録) だけである、しかも夫れが2個所において挙げられているのである。「ケネーの、支出と生産物との流れの圖式を再描寫し其の詳細に立ち入る要はない。最少量の努力でその本質的な考え方を把えんとする最善の方法は、都留重人による優れた紹介を見ることである」(239 頁)。

× × × ×

この書は何よりも遺稿であつた。これを此の出版せられた姿にまで持ちこむためには、シュムペーター夫人の不撓の努力にまたねばならなかつた。恐らくはそのための激務に由つてであろうか、夫人もまた此の出版をまたないで昨年7月17日に逝去せられたのである。夫人の序文やその手になる附録に鑑みると、この書は二重の意味においての遺書であるという風にすら感ずる。マルクスの遺稿も『剩餘價値學說史』であつた。終生恐らくマルクスとも取組んだと思われ、少くとも同じく資本主義經濟の根本問題と取組んだシュムペーターの遺稿も、同じく茲にあげた學說史であつた。生前に完成してしまふような仕事だけしか持たないものは眞の學究とは云えないかも知れぬ。死ぬまで發展してやまぬ自分をも更に對象として包攝してやまない研究をすることこそ眞の學究を定義するものであるかも知れぬ。そして夫れは恐らく學說史において最もよく爲されうる場面であろう。そうであるならば、眞の學說史こそ、いつでも遺稿たり、未完成の書である運命にあるものでなくてはなるまい。